劣化の魔術師

カワウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
劣化の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ４３０５ＢＡ

【作者名】
カワウチ

【あらすじ】
夏休みのとある日に、古川大河は、熱中症で倒れた所を灰色のローブを身にまとった少女，シノに助けられる。
シノは自分の事を、魔王の娘と名乗り、異世界から逃げてきたと大河に告げる。
大河は助けてもらった恩返しに、シノのこちらの世界での生活をサポートする役目を申し出るが……

プロローグ

中学生になって二度目の夏休みが始まって一週間。

本来なら、これから一か月ちょっと続く長期休暇に胸を躍らせていたはずのこの時期を実際迎えてみると、驚くほどにテンションが低かった。

夏休み開始一週間で此処までテンションが低いのは、恐らく初めてのことだろう。

公園のベンチでため息をつきながら自分の左足を見る。

包帯にグルグルに巻かれたギプスと手元に置かれた二本の松葉杖。これを見れば誰だって俺がどういう状況に置かれているか分かるだろう。

骨折。原因は後先考えずに行った馬鹿な行為。

学校の急な坂を自転車で疾走していた所、自転車がパンクして身を放りだされた。

そのまま何の受け身も取れずに地面に叩き付けられ、左足を骨折。こんな事をしておいて骨折で済んだのは不幸中の幸いだが、不幸な事に変わりはない。

中二は人生で一番馬鹿な時期と言うのは、強ち間違っていないようだ。

ちなみに何故運動もできない俺が公園のベンチに座り込んでいるかというと、これまた面倒くさい事情があったりする。

「くっそ……まさか幸運が不運に移り変わるとはな……」

先週から両親が海外出張、そして姉さんは海外にホームステイ中の為、俺は悲願の一人暮らしとなった。

親や姉さんが居ると何かと制約が多い。あの時の俺は、自由な夏休みを目の前にして、一人ガッツポーズをしていた。

が、実際夏休みに入ってみればこのありさまだ。

少々家から遠い接骨院への移動は、両親が居ないため車が出せず、慣れない松葉杖を使って炎天下の中を歩かなくてはならなくなった。

今は帰りだから少々気楽だが、行きの時はこの距離を報復しなくちゃいけないという絶望感に頭を抱えた。

両親が居なくなって喜んでいたあの日の自分を殴りたい。

そんなわけで、中間ポイントである公園で、途中休憩の為にベンチに座っている。

それにしても最近の小学生は外で遊ばないのだろうか。三時前の公園には誰もいない。

ついさっきまでジョギングしていた爺さんがいたけど直にどこかへ行ってしまい、公園に残っているのは俺一人。

「にしても今日も熱いな……」

今日最高気温三十五度だっけ。こんな炎天下の中外に居続けたら、今度は熱中症で内科の世話になることになる。

変な幻覚とかを見る前に、早めに帰った方がいいかもしれないな。

残りの距離を歩く覚悟を決め、松葉杖に手を伸ばしたその時、

「……え？」

俺は目に映った不思議な存在に呆気をとられて、伸ばした手をひっこめた。

樹木の死角となっている所から、同年代位の少女が姿を現した。

ショートカットの、とても可愛い女の子だったが、それだけでは呆気にとられたりなんてしない。

なんというか奇抜だった。

まるでＲＰＧで魔道師が着ていそうな、灰色のローブを身にまとっている。

どう考えても日本で普段着として着る様な服ではないし、それを置いといても夏に切れる様な服ではないはずだ。

「これ……やっちまったかな……」

熱中症で幻覚見てるんじゃないか？　こんなの絶対おかしいだろ。

いや、熱中症でこんな幻覚は見ねえか。よく分かんねーけど。

「……そろそろ帰るか」

本当に熱中症にでもなったりしたら面倒だ。

今度こそ松葉杖を手に取る。

使い始めて間もないからだと思うけど、どうも使いづらいんだよなこれ。まあこれがなきゃ歩くことも出来ないから使うけどさ。

松葉杖を使い立ち上がり、公園の出口に向かい歩きはじめる。

さて、残り四分の一の距離。頑張って歩きますか。

そう意気込んで、一歩一歩と前に進む。

慣れない松葉杖を駆使し、数歩歩いたところで俺は立ち止まった。

「あれ……んだこれ……」

急に強いめまいが俺を襲い、視界がぐるぐると回った。

これって……マジで熱中症……。

バランスを崩した俺の体は、そのまま地面へと倒れ伏す。

覚えているのはそこまでだった。

日常のエピローグ　非日常のプロローグ

後頭部に柔らかい何かに乗っている。

枕ってこんなだったか？　ていうかなんで俺、寝てるんだっけ。

そうだ……たしか家に帰ろうと思って……熱中症で倒れたんだ。

重たい目蓋を開く。

すると、あの奇抜な服装の少女が目に映った。

「あ、大丈夫ですか？」

俺の顔を覗き込んでそう言った少女は、どこかほっとした感じで続ける。

「急に倒れたんでびっくりしましたよ。大事に至らなくて本当に良かったです」

此処が病院ではなく、公園の日陰な所を見ると、この子が看病してくれたと考えて間違いはないだろう。

さっき幻覚扱いしたのを謝りたい。本当に悪かった。

ところでこの柔らかい感触はなんなんだろう。

冷静に考え始めると、数秒で答えが導き出された。

「うおあぁっ！」

自分でも良くわからない声を上げて起き上る。

柔らかい感触の正体は、少女の腿。つまり膝枕。

「ご、ごめん！」

俺が本能的に謝ると、少女は首を傾げて、

「どうして謝るんですか？」

と、聞いてくる。

どうしてっていわれてもなぁ。

とりあえず膝枕の事は一旦置いておこう。なんか気まずくなる。

「あ、ありがとな。おかげで助かったよ」

俺を看病してくれた少女に、感謝の意を表す。

「はい。私の回復魔術が役に立って良かったです」

「はい、ちょっとストップ」

え、何？　回復魔術？

「え？　私変な事言いましたか？」

「さっきの自分の発言を思い出してみろ。なんだよ魔術って」

恩人にこんな事を言うのはなんだけど……この子……アレだろ？

「魔術は魔術ですよ」

当たり前のようにそう言う少女。

ああ、確定だわ。この子厨二病だ。それも結構重症な。

「あの、助けてもらった奴にこんな事言うのもなんだけどさ、人前で魔術とかありもしない様な事を言わない方がいいぞ」

死ぬからな、社会的に。

「ありもしないって……魔術はありますよ」

まだ言うか。これは本格的にヤバいんじゃないか？

「じゃあよ、見せてみろよ、その魔術って奴を。そうすりゃ信じてやるよ」

大体この手の奴は、こういった状況に陥った時こういうらしい。

この力は人前で使ってはいけないとか、今日は調子が悪いとか。

この少女は、魔術で俺を助けたと言っているから、前者はないだろう。

おそらく後者の様なパターンで逃げるに違いない。

「わかりました。じゃあ見せてあげますよ。私の魔術」

アレ？　見せるっておい……出来もしない事を宣言しておいてどうする気だ？

「うーんと、何を使いましょうか……あ、そうだ」

少女は俺の左足を指差す。

「この左足の怪我を治しましょうか？」

「治すってお前……これ骨折だぞ？　そう簡単に治るわけねーだろ」

「その位だったら二十分もすれば治りますよ」

少女がそういうと、俺に向かって掌を突き出す。

治るわけねーだろ。

心の中でそう吐き捨てて、少女が言い訳を始めるのを待つ。

「じゃあ、始めますよ」

少女がそういうと、少女の足元に黄緑色の魔法陣の様な物が展開される。そして間髪開けずに、俺を中心に同色同型な物が展開され、それと同色の光の粒が、蛍の群れの様に空へと上がっていく。

「……あ、うん。分かったよ」

俺は呟くようにそう言った。

「魔術の存在、認めてくれましたか？」

「今、俺は夢を見てるんだ。きっと本当の俺は病院で点滴でも受けているに違いない」

だってそうだろ？　こんなのが現実な訳がない。

「あんまりそんな事ばかり言ってると私、拗ねちゃいますよ？」

少女がなにか言ってるようだが、どうでもいい。これは夢の話だ。

さっさと頬をつねって現実へと戻ろう。足が治るなんて夢を見ても、起きてからが辛いだけだ。

右手で頬を摘み、つねり上げる。

◆◆◆◆◆◆◆

「どうですか？　夢からは覚めました？」

「……ここが現実でした」

一分間ほど粘ってみたが、全くもって冷める気配など無かった。

どうやら本当に現実らしい。

あれだけの痛みを感じたのにも関わらず、俺の足元には黄緑色の

魔法陣のような物が展開されている。きっと魔法陣なのだろう。
魔法陣の外周あたりには、みたことの無い言語が並んでいる。呪文だったりするのだろうか。
「ごめん、いろいろ疑ったりして。魔術の存在、認めるよ」
もうこうなったら認めるしかない。
確かに魔術なんて夢の様な話だけど、確かに目の前で夢の様な事が現実に起きているんだから。
「分かってくれたらそれでいいです。別に怒ったりしてませんから」
笑ってそう言う少女。
なんかすげえ良い奴だな。
「それにしても……まさか魔術なんてもんが実際にあるなんてな。ビックリだよ」
存在を認めてみると、なんか非常に興味が沸いてきた。
「なあ、魔術ってどうやったら使えるんだ？　教えてくれよ」
「残念ですけど、人間に魔術は使えませんよ。魔術は悪魔の使う術と書いて魔術です」
えーっと、つまりだ。この子の言っている事が正しかったとすると、この子は……。

「それじゃあお前が悪魔って事になっちゃうんだけど……流石にそれは無いよな？」

流石にそれは無い……よなぁ。

でも魔術だってあったし、その仮説を否定しきれない。

「いいえ、私は悪魔です。この世界とは違う世界。いわゆる異世界って所から来ました」

本来な絶対信用しない様な話だが、魔術なんてもんが存在していると知った今、もう何が正しくて、何が間違っているのかが分からない。

魔術があるんだから……人間そっくりな、異世界出身悪魔だって……居るよな？

「でもお前、どっからどう見ても人間にしか見えないんだけど。悪魔ってみんなそうなのか？」

悪魔って、てっきりＲＰＧのモンスターみたいな感じだと思ってたんだけどな。

「悪魔は悪魔としてのランクが高いほど、容姿が人間に近くなるんです」

ランクが高いほどって事は、人間そのものみたいな容姿をしているこの子は相当凄い奴なのか？

悪魔で一番ランクが高いって言ったら……まあ魔王だろうな。

でもそんな奴がこんな所をうろうろしているとは思えないし、いわゆる四天王的な奴なのかな。

「あ、自己紹介がまだでしたね。私はシノって言います。えーっと……魔王の娘です」

「魔王の娘！？」

予想を遥かに上回ったなオイ！

「驚きました？」

「まあ……魔術の存在を知った時位には」

魔術なんてもんを見たせいで、ある程度の事では驚かない自信があったけど……これは流石に許容範囲を超えてるな。

魔王の娘って……超大物じゃん。

「えーっと、あなたの名前はなんて言うんですか？」

唐突にそんなことを聞かれた。

まあ自己紹介をされたんだから、こっちも名乗るのが常識か。

「俺は古川大河。よろしくな」

「はい。こちらこそよろしくお願いします、大河さん」

た、大河さんって……名前呼びかよ。

女の子に名前を呼ばれることなんか無かったから、嬉しいのか……恥ずかしいのか。よく分かんねえ。

「えーっと……なれなれしかったですか？」

「いや、そんなことない。大河でいいよ大河で」

その方が断然いいに決まっている。

にしても魔王の娘ねぇ。とてもそうとは思えないな。

悪魔ってのはもっと極悪非道なイメージがあるけど、シノからは微塵もそんな雰囲気は感じられない。

普通に可愛い女の子って感じしか……しないんだよな。

「でさ、なんで魔王の娘なんてすげえ奴がこんな所をぶらついてる訳？」

ふと浮かんだので聞いてみる事にした。

「駄目なんですか？」

「いや、だめじゃないけどさ、一応身分が身分だから、特別な理由でもあるのかなって」

俺がそう聞くと、シノは黙りこむ。

やっぱり何か言えない特別な理由があるのだろうか。

まさかこっちの世界を侵略しにきたとか……ってそりゃねーか。

シノがそんな事をするとは思えない。

勝手に考察していると、シノが沈黙を破った。

「私は……逃げてきたんですよ」

「逃げてきたって……なにか嫌な事でもあったのか？」

「……基本的に嫌な事しかないですよ」

シノは俯き、呟くように続ける。

「殆どの悪魔は……人間を殺して世界を取ることしか考えていないんですよ。そんな気が無い私が、そんな中で生きるのって……どれだけ辛いか分かります？」

なんだよそれ……そんなの辛いってレベルじゃねえだろ……。

シノに人を殺す気はない。でも周りの連中は殺す。

それってつまり、平和主義の一般人が、テロリストの一味の中に居る様なことだよな。

しかも魔王の娘なんて重荷を背負わされて。

「お前……そんな中で一人ずっと耐えてきたのか？」

「いえ、一人だったのはちょっとの間だけですよ……本当に少しの間だけ。私はそれが耐えられなくてこっちに逃げてきたんです」

それってつまりどういうことだ？

ちょっとだけってことは、シノの周りには仲間がいたのか？　それが一人になったってことは何かあったのか？

俺がシノの言葉の意味を必死に探っていると、シノがその解を語り始めた。

「私には……双子のお兄ちゃんが居るんです。人間と戦うのに乗り気じゃない私を、周りの悪魔から守ってくれたお兄ちゃんが」

兄っていうと……魔王の息子ってことになるのか。

「お兄ちゃんも人間を嫌ってませんでしたし……まあ私と違ってお兄ちゃんは世渡りが上手かったですから、他の悪魔の前でそんな素振りはみせませんでしたけど」

懐かしそうに語るシノだったが、ここで少し間が空いた。

なにか辛い事があったんだろうなと言うことは、俯いたシノの顔を見れば直に分かる。

「でも一か月前、突然お兄ちゃんがいなくなったんです」

「いなくなったって……まさか死んじまったとかじゃ――」

「そんなわけないです！」

シノは感情的になって叫ぶ。

「そんなわけ……ないですよ……」

涙をこらえながら震えた声でそう言うシノ。

「悪い。魔王の息子だったら……そう簡単に死なないよな」

シノは黙って頷く。

「その兄貴がどこにいるか分かるのか？」

シノは口を閉ざしたまま答えようとしない。

多分知らないだろう。知っていたらもう少し違った反応を見せるはずだ。

「じゃあ、どうしていなくなったのか、知っている奴いなかったのか」

「……父や、その周りの悪魔達は、みんな知っている雰囲気でした。でもみんな知らないふりをして教えてくれませんでしたよ」

それって、そいつらがシノの兄貴を……いや、仮にも魔王の息子だぞ？　自分の後継者を消す様な事を、魔王がするとは思えない。

「それで、兄貴がいなくなったから、そっちの世界に居られなくな

ったって事か」

「……はい」

そう言ってシノは頷く。

支えだった奴がいなくなる。支えがあっても辛い様な場所で、その支えなしで生きていくなんて不可能だろう。

一か月前に消えたって事は、もしシノがこっちの世界に来たのが昨日今日の話なら、一ヶ月間もその環境に居たことになる。

多分本当に昨日今日の話なんだろう。この服装で町を出歩いていれば、少なくとも噂ぐらいにはなっているはずだ。

やっぱり一カ月近くあの環境に居たって事なのだろうか。

「それで、こっちの世界に来たすぐに大河さんが倒れるところを見て、今こうしているわけです」

本当に一か月もそんな所に居たってのかよ。考えただけでゾッとするな。

「それで、お前はこれからどうすんの？　これからの事とか考えてんのか？」

俺はシノにそう尋ねた。

出来ればこの子の力になってあげたい。俺にできる事ならやってやるさ。

恩人にこんな話されたら嫌でも助けてやりたくなってくる。

「こっちの世界の事は、悪魔がいない世界って事ぐらいしか知りませんから、どうすればいいかなんて分かりません。まあ、まず寝床を探さなくてはいけないって事位は分かってますけど」

本当にどうするつもりだろう。

世界が違えば通貨も違うだろうし、寝床だけではなく、食べ物にありつけるかどうかも分からない……いや、分かる。無理だ。

普通の家出ならともかく、異世界からの家出となると、ハードルが高いな。

俺はこの子の協力に何ができる。

寝床探し……んなもん直には思いつかねえし、なんかねーかな。

「あ、そうだ」

寝床提供！　これどうだ？

家には誰もいないし、女の子一人ぐらい止めても問題ない……わけ無いよなあ。

男友達を止めるのとはわけが違う。

それってつまり、女の子と一つ屋根の下って事だよな。いろんな意味で大丈夫なのかこれ。

でもまあ、俺にできそうな事ってこれ位しかないしな。

「とりあえず、俺ん家の部屋空いてるけど……使う？」

なんか凄い緊張したが、なんとか聞けた。

「え？　いいんですか！」

「まあ、足の事もあるし……なによりここで放っておいたら心配でしょうがないっつーか」

「じゃあ……お願いして良いですか？」

とりあえず、異性が泊まるという点以外は何の問題も無い。

さっきシノに言った通り部屋は空いてるし、金だって結構な額が生活費として送られてきている。通院費だってもう必要なくなったし、一人分の食費が増えた位問題ない。

「おう、大丈夫だ。歓迎するぜ」

「あ、ありがとうございます！」

やっぱ女の子に感謝されるっていいもんだな。思い切って提案して良かった。

「それじゃあ……よろしくお願いします、大河さん」

「こちらこそ。よろしくな、シノ」

そう返した俺の足元に展開されていた魔法陣が、徐々に薄くなって消滅した。

治療が終わったのだろうか。

「終わりましたよ。もう普通に立っても大丈夫なはずです」

「お、マジで？」

久しぶりに両足を使って立ち上がる。

痛みは無い。久しぶりなので違和感があるが、確かに足が治っている。

「すげぇ……本当に治った」

やっぱり魔術って凄げえよ。本当に漫画みたいだ。

「どうですか？　足の調子は」

「元通りだよ。本当にありがとな」

「どういたしまして」

シノは笑ってそう言った。

「じゃあ、とりあえずここは熱いし、さっさと俺ん家に行こうぜ」

「はい！」

元気よくそう返したシノはゆっくりと立ち上がる。

「あ、そういえば俺の松葉杖は？」

使わないとはいえ、病院の借り物だ。ちゃんと持って帰らねば。

「あ……起きっぱなしです。すいません」

「マジで？」

「……すいません」

まあ責めたりはしねえけどよ……まさか誰かに取られたりしてないだろうな。

「とりあえず松葉杖回収して、家に向かうか」

「はい……残ってると良いですね、松葉杖」

残っていないと困るんだが。

ちゃんと松葉杖が残っている事を祈りながら俺達はその場を離れた。

初めての日本文化

どこかの親切な人が落ちていた松葉杖をベンチに立てかけてくれていたらしく、直に見つけることが出来た。

しかしまあ、しっかりと両足で歩けるのに松葉杖を持っているってのも不思議な光景だ。

そんでもって俺の隣には不思議な服を着た悪魔の少女が居る。

すれ違った人が、不思議そうな目で見てくるのも、この服装が原因だろう。

とりあえ服装をなんとかしないとなとか考えつつしばらく歩いていると、自宅が視界に入った。

松葉杖の頃と比べると大幅なタイム更新だ。改めて治ってよかったと痛感するな。

「よし、着いたぞ」

何処にでもあるような一軒家。それが俺の家だ。

「さ、入れよ」

「お邪魔します」

そう言って家の中に入ったシノは、なんだかウキウキしはじめた。

あれだろう。引っ越したりしたときに、目新しい新居をみてテンションが上がるのと同じだろう。

俺も小三の時に此処に引っ越してきた時に、目新しいこの家を見てテンションが上がったもんだ。

普通の引越しであれだけテンションが上がったんだがら、異世界から来たシノはもっとすごいに決まっている。住宅事情も違っているだろうし、目新しいだろうしな。

「私の居た世界と随分と違いますね。凄いです」

ごく普通の間取り。ごく普通の家具なのだが、やはり珍しい物は凄く感じるのが人間だ。いや、シノは悪魔か。

「まあとりあえずあがれよ」

玄関で靴を脱ぐと、シノは不思議そうに、

「こっちの世界では靴を脱いで生活してるんですね」

「まあ国にもよるけど、日本じゃこんなもんだよ」

そう返して家に上がり、とりあえず居間に足を運び、部屋の隅に松葉杖を置く。

明日あたりに返しに行くか。もう必要ないし。

どうやって説明しようかな。急に治ったなんか説明出来ねーぞ。

「あ、その辺座って」

まあこの事は後々考えて行こう。それより今はシノの事が先決だ。

「今お茶入れるから」

そう言って隣の大所に向かう。

茶葉とお湯を急須に入れ、湯呑に注ぐ。

お茶菓子も一応用意するか。ちょうど来客用の羊羹も有るし

この前食べたけど、おいしかったなコレ。

多分喜んでくれるだろう……多分。

なんかシノの服装を見る限り、和風ではなく洋風の文化が広がっていそうだから、こういうのは口に合わないかもしれない。

ま、今家に有るのはこれだけだから、どうしようも無いんだけど。

それらをお盆に載せ再び茶の間へ戻った。

「お待たせ」

テーブルに二人分の茶碗と羊羹を置いて、シノの対角線上に腰を下ろす。

「えーっと、これは？」

ああ、シノの世界には煎茶や羊羹が無いのか。勿体ないなぁ。

「煎茶と羊羹。うまいから食べてみろよ」

「あ、はい」

そう言ってシノは羊羹を口に運ぶ。

「あ、甘くておいしいです！

」

シノの顔が、無邪気な子供の様な笑みを浮かべる。

どうやら甘い物が好きみたいだな。

女の子は甘党が結構多いみたいだけど、どうやらそれは悪魔も同じらしい。

「そりゃ良かった。あ、煎茶も飲んでみろよ。おいしいから」

俺が進めると、シノは湯呑を両手で持ち、

「それにしても、黄緑色の飲み物なんて初めて見ましたよ」

不思議そうに煎茶を眺めたシノは、恐る恐るといった感じで、煎茶を啜る。

「これ……おいしいですね」

どうやらこちらも好感触だったらしい。

「気に入ってくれたなら良かったよ」

笑ってそう言うシノに、俺は笑ってそう返した。

魔術ｏｒ超能力

「そういえばさ」

お茶を飲んで一段落すると、色々と疑問が浮かび上がってきた。

「お前ってさ、異世界から逃げてきたんだよな」

「はい、そうですけど」

「追っ手とか来ないわけ？」

仮に悪魔が追って来ようものなら、バトル漫画の様な展開が起きそうだが、残念だが俺にはそれを対処する術がない。

魔術とか使えないから、バトルなんて専門外だもんな。

「まあそれなら大丈夫だと思いますよ」

「どうして？」

「逃げるからにはちゃんと足が付かない様にしてますし、それに悪魔からしたら、こっちの世界は人間しかいない、いわば敵地ですからね。そう簡単に踏み込んで来れませんよ」

「なるほど……でもお前、魔王の娘なんてポジションじゃん。それって意地でも連れて帰ろうとするんじゃないのか？」

「いや、それは無いと思います」

シノはきっぱりと言い切った。

「今は勇者との交戦中ですから、少しでも戦力が欲しい所でしょうし、転移魔術が使える様な高等悪魔を敵地のど真ん中に送る様な真似はしないと思いますけど」

そんなもんなんだろうか。仮にも自分の娘なんだから、意地でも連れ戻すと思うんだが、そこは人間と悪魔の考え方の違いだろうか。

「それに私はお兄ちゃんと違って、連れ戻しても戦力になりませんから。だから父にも嫌われてましたし」

子供が自分の理想から遠いから嫌うって、最悪な親だな。

まあ今回の場合、嫌っていたおかげで助かった訳だが。

にしても勇者ねぇ。本格的にファンタジーな世界だな。

「ていうか勇者と交戦中って、人間は魔術が使えないんだろ？　よく魔術が使える悪魔と戦えるな」

たとえ戦いのプロでも、魔術が使える相手と戦うとなると、相手にならないだろう。プロボクサーが戦車と戦う様なものだ。

「そんなこと無いですよ。人間には超能力がありますから」

「超能力？」

「はい、超能力です」

えーと、超能力っていうと、テレビとかでたまに特集が組まれている、あの胡散臭い奴か？

「えーっと……たとえばどんなのがあるんだ？」

「本で読んだのですと……念力だったり……」

ああ、例の胡散臭い奴だわ。本当に超能力だったんだな、アレ。

「あと、手から炎を出したり……」

パ、パロキネシスって、そんな漫画の代表的な能力を、リアルな人間が使えんのか！？

「とにかく色々ありますよ」

すげえな、人間にもそんな能力が備わってるのか。

となれば当然この事が気になってくる。

「超能力って……俺にも使えるかな」

本当に存在しているって分かったら、やはり使いたくなってきた。

パロキネシスとか使いてえな……いや、でもそんなもん使えたら家火事になりそうだな。もっと他の物が使いたい。

「それはちょっと分かりませんけど、可能性はあると思いますよ」

「可能性ねえ……」

それは一体何パーセントくらいなのだろうか。

仮に俺が超能力に目覚めたとして、俺は一体どんな能力を使うことができるんだろうか。

「って、こんなもん考えても仕方がねーよな」

考えたって何か変わるわけでもない。いくら未来予想を立てたって、それが現実になるなんて事はきっとないんだから。

「なあシノ。お前って他にどんな魔術使えんの？」

俺は興味を超能力から、目の前に確かにある異能に向ける事にした。

「他の魔術ですか？」

「おう、他の魔術。なんかもっと……派手な奴」

さっきも話題に出た炎を操るとか……あ、やっぱ炎は家が燃えそうだから勘弁してほしいな。

「あ、攻撃魔術とかは止めてくれよ」

炎だけじゃなくても、攻撃系の魔術全般をこんな所でぶっ放したら家所か、ここら一体が消し飛びそうだ。

「心配しなくても私はそんな物騒な術式は使えませんよ。ほら、さっき戦力にならないとか言ってたじゃないですか」

ああ、言ってたな。

戦力外って、てっきり戦う気が無いから使えないって意味だと思ってたけど、どうやら違ったみたいだ。

いや、違っては無いか。

シノに戦う気が無いのは事実だろうし。

「ていうか全く使えないのか？　魔王の娘なんだから、何かしら使えると思ったんだけど」

「はい、使えませんね。下級魔術ですら扱えませんから」

「まあお前が、町を破壊できるような魔術をぶっ放している所なんて、想像もつかないけどな」

どちらかというと、結界のような物で攻撃魔術から周囲を守っている様なイメージがある。

「守る方なら得意なんですけどね」

予想通りだな。

「じゃあその守る術って奴を見せてくれよ。肉眼で確認出来る様な奴」

俺がそうリクエストすると、シノはニッコリと笑って、

「分かりました。じゃあ私のとっておきの魔術を見せてあげます」

と、言って立ち上がった。

とっておきか。どんなのが出てくるんだろうか。

「じゃあ始めますよ」

シノがそう言うと、シノの足元に魔法陣が展開される。今度は黄緑色ではなく水色だ。そして回復魔術の時と同じように、外周を記号が埋めている。

静かに展開されていた回復魔術と違って、僅かだが魔法陣から風の様な物が発生しているのが分かる。そよ風と言った感じだ。

ああ、なんか扇風機の弱みたいで気持ちいい。

「いきますよ！　大河さん、見ててください」

シノがそう言って俺の方に右手を突き出すと、水色の半透明な壁が出てきた。

シノを覆う様に半ドーム状で形成されている。

ＲＰＧや漫画だと結界とか言われている奴だ。

「す、すげえ。」

「これ凄く堅いんですよ。殴ってみます？」

「いや、それは遠慮しておく」

そんな壁を殴る様な真似はしたくない。だって手が痛いじゃん。

「ちなみに凄く堅いってどのぐらいだ？」

「殆どの攻撃を防げると思いますよ。こういう魔術だけが取り柄ですから」

シノは笑ってそう言う。

「……にしても本当にすげえなこれ」

そんな事を呟き、結界を右手で触れる。

俺も……こんな力が使えたら良いのに。

そう思った時だった。

「な……ッ！」

右手が急に熱を持ったと思うと、今度は軽い頭痛が俺の脳を襲った。

しかし直に右手の熱は消え、頭痛も治まった。その変わりと言わんばかりに、俺の頭に何かが流れ込んでくる様な感覚に見舞われ、その不思議な感覚に、俺は反射的に右手を頭部に伸ばす。

「なんだ……コレ」

頭を抱えながら、今の状況を分析する。

流れ込んできたのは記号の羅列……魔法陣の外周に浮かんでいたアレと同じじゃねーか？

正確には記憶していなかったけど、多分あっているはずだ。

なんでこんなもんが頭の中に……。

「だ、大丈夫ですか！」

シノが結界を解いて、慌てて駆け寄ってくる。

「別に痛いってわけじゃないから大丈夫だとは思うけどよ……」

とりあえずこの記号の事は、俺の知識だけじゃどうにもならない。シノに伝えた方が良いよな。

「なあ……あの魔法陣の周りに書いてあった記号……ってか文字？あれは何なんだ」

「あれは……魔術言語です」

「魔術言語？」

「はい、そうですけど……」

魔術言語……やっぱり魔術関連か。

だとしたらなんで俺の頭に入ってきたんだ？

「あの……どうしたんですか？　そんな事を聞いて」

「流れてきたんだよ」

「流れてきた？」

「ああ、その魔術言語って奴が頭の中に入ってきたんだよ」

シノは俺の言葉を聞いて一瞬呆けるも、直に我に返って唸りだす。

しばらくして、何か分かったように口を開いた。

「大河さん……その魔術言語、まだ頭の中に残ってますか？」

今は入ってきているって感じは終わって、その魔術言語がぼんやりと頭の中に浮かんでいる状態だ。

「ああ、残っている。ぼんやりとだけどな」

それを聞いて、顎の下に手を置き、探偵の様に唸りだすシノ。

「大河さん、本当に仮説なんですけど……」

そう前置きして、シノは言う。

「もしかして……今なら魔術が使えたりするんじゃ……」

居間に沈黙が訪れた。

シノ、今、なんて言ったんだ。

魔術が使える？　確かにそう言ってたよな。

でも、そんなの矛盾しているぞ。

人間に魔術は使えない。俺と出会った時に言ってたじゃないか。

尚も俺の頭には魔術言語が存在している。

「大河さん……その魔術言語を……選択してください」

「選択？」

なんだそりゃ。まるでゲームのウインドウから呪文を選ぶみたいだ。

「えーっとなんというか……その言語を使う！　って感じでイメージをしてみてください」

「あ、うん。やってみる」

なんだかよくわからないが、全く知識が無い俺はシノに従うしか術がない。

選択……選択……これを……使う！

既に頭に浮かんでいる魔術言語を必死にイメージした。イメージ

というより心に焼き付けるといった表現の方が正しいのかもしれない。

そして一瞬。体が軽くなったような錯覚に陥った。

「なんだ……魔法陣……？」

そして俺の足元には水色の魔法陣が展開され、辺りにそよ風が漂っていた。

そして魔法陣の外周には、さっきから頭に浮かび続けている魔術言語が記されていた。

「やっぱり……魔術……」

シノが呆気に取られたようにそう言う。

まさか使えるのか……あの結界を。

何故かはわからないが、使い方が分かる気がする。

結界を出したい方角にこの右手を突き出して、結界をイメージすればいい。

右手が震える。

つい数時間前まで、魔術や超能力なんて異能はフィクションだと思っていた。

それを、その異能を俺が使おうとしているんだよな。

「やべ……緊張してきた……」

なにせ使えるはずもない魔術を使おうとしているんだ。緊張位するさ。

……心の準備だ。深呼吸しろ。

息を吸って吐く。この動作を計三回続けて、

「よし……やるか！」

俺は正面に右手を付きだす。

「……行くぞ！」

イメージする。さっき見たあの結界を。

刹那。俺の正面に、水色の結界が出現した。

シノの様にドーム状の結界ではなく、俺のは正面のみを覆っている。

「これは……結界……ですよね？」

「俺が……つかったんだよな」

「みたい……ですね……いや、でも……」

シノは、まるで俺が初めて魔術を見た時の様に、目の前の状況を

把握しきれていないらしい。

使った本人である俺だって、理由が全く分からない。

なんで人間の俺が魔術を使えたのか。

「大河さん、もしかして今の……超能力じゃないですか？」

シノがそんな事を言った。

「超能力って……この結界って魔術じゃないのか？」

「いえ、確かにそれは魔術ですけど……私が言ってるのはその前です」

「前？」

前っつーと、頭痛とか右手の熱とかの事か？

「あくまで仮定なんですけど、大河さんは私の魔術をコピーしたんじゃないですか？」

「コピー？　そんなのどうやって――」

「そこで超能力ですよ」

俺は自分の右手を見て、再びシノの方を見る。

「じゃあなにか？　俺が魔術をコピーする超能力を持っていて、その力で魔術をコピーしたと」

「まあ、そうなりますね。というかそれ以外考えられません」

まてよ、それだったら、

「じゃあなんで公園に居た時、俺は回復魔術をコピー出来なかったんだ？　一応手も触れていただろ？」

足を治療していたと思われた回復魔術。実は全身に作用していたみたいだ。先日、晩御飯の調理中に左手の人差指にできた切り傷。ほぼ塞がっていたその傷は、綺麗さっぱり無くなっていた。どう考えても回復魔術の効果だろう。

「きっと何か能力を発動する条件があるんですよ。あの時と今、なにか違いはありませんでしたか？」

なんだろう、なにか有ったか？

必死に考える事、約十秒。

「あ、もしかして」

それっぽい違いを発見した。

「結界の時に俺、こんなの使いてえなみたいな事を考えてたんだよ。もしかしてそれじゃねえのか？」

「多分それですよ！」

「おお、マジでか！」

欲しいと思えば手に入る。す、すげえ……。

まあ確証が持てないから、後でもう一回くらいシノに魔術を使ってもらって実験してみる事にしよう。

「そういえば……」

結界を張った時から、少々気になった事があった。

「この結界さ、シノのと比べてショボくないか？」

なんだか一回も二回りも小さい程小さい。体勢を低くしてやっと全身を隠せる程度の大きさ。大体直径で一メートル位だろうか。

あと何か色が薄い。なんというか……脆そうだ。

「あれか？　経験不足って奴かな？」

「強度なんかは術者によって変わってきますけど……大きさとかは変わらないはずなんですが……」

え、じゃあなに？　なんでこんな事になってんの？

これじゃあまるで劣化コピーじゃん。

「もしかして大河さんの能力、コピーとかじゃなく……劣化コピー？」

言われたぁぁぁぁぁぁっ！

薄々自覚していても、他人から言われると心にザクリと来るものがある。

俺は肩をがっくりと落とし、

「ま、まあ。劣化コピーだろうと使えたことには変わりないし。人間が魔術を使える事自体が異常なんだから、きっと中身は劣化でもやっていることは凄いはずだ」

ひたすら自分は凄いと言い聞かせた。

落ちついて考えろ、本当に俺は凄いんだ。ナルシスト的な意味ではなく。

「でも良かったじゃないですか。超能力が使えて」

超能力って言って良いのか、魔術って言って良いのか分からないけどな。

まあそれはどっちでもいい。

「そうだな。これで十分だよ」

結界を解除する。

発動時もそうだったが、今回も解除の仕方が何となく分かった。

消そうと思ったら消える。実に簡単な作業だ。

使い方が分かるのも、この能力の特性なのだろうか。

ちなみにこの結界。手を動かせば結界が追尾してくる。超便利そうだ。丈夫かどうかは別としてだ。

「そういえば、魔術を使うのに魔力とかそういった類の物って使わないのか？」

なんとなく気になったから尋ねてみた。

ＲＰＧなんかだと、魔術を使うのにはＭＰなんてもんを使ったりするし、現実でもそうなんじゃないかなと思うんだが。

「使いますよ？　魔術は魔力を力に変えて使う術ですから」

「俺が魔術を使ったって事は、人間も魔力を持っているんだよな。人間は何に魔力を使うんだ？」

まさか宝の持ち腐れって事は無いだろうな。

「超能力です。魔術と超能力の違いを大雑把に言うと、魔力の出力形式の違いだけですから」

出力形式の違い……ね。

「ところでシノ。さっきから頭の中に魔術言語が浮かびっぱなしなんだが、何とかならないのか？」

こればっかりは消し方が分からない。

「うーんと……普通に魔術を使うのを止めようって思えば消えると

思いますよ」

随分と簡単だな。簡単に越したことは無いが、もっと凝ってあった方がカッコイイと思う。

「分かった……とりあえず消してみる」

とりあえず一旦魔術は止めよう……あ、すげえ。綺麗さっぱり消え去った。

「使おうと思った時は使おうと思えばまた出てきますよ」

もう一度使う……出てきた。本当に簡単だなオイ。

そう思いながら、俺は魔術言語を何度も何度も出し入れした。

本当に、魔術が使えるようになったって事を改めて自覚する。

でもこれ……使う場面あんのかなぁ。人前で使ったら騒ぎになりそうだし。

騒ぎと言えば、シノの服装だ。

このまま街中を歩けば、騒ぎっつーより変なうわさが立つ。

「なあ、シノ。突然だけどさ、お前その服以外に服持ってきてねーの？　その服じゃ目立つだろ？」

魔術とかで四次元に収納とかしていないのか？　そんな事ができるか自体分かんねーけど。

「えーっと、持ってないですね。そもそも私の居た世界とこっちの世界は衣服の文化が違うみたいですから、仮に持っていたとしても、こっちの世界じゃ目立ってしまう様な服しかないですから意味がないと思います」

ああ、そっか。そりゃそうだよな。

でもどうしようか。

こんな状態で外に出すわけにもいかないし、かといって家から一歩も出さないなんて事はしたくないし。

「しょうがねえ、姉さんの部屋から勝手に持ってくるか」

どうせホームステイ中だ。バレやしない。

で、姉の服を着て、何かしらの服を買わせればいい。これが最善の選択だろう。

「勝手に着ちゃって大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ」

……多分な。

ビフォーアフター

姉さんの部屋から、適当に服を持ってきた。

やはり勝手に部屋の中の物を拝借するのは、少々気が引ける行為だったが、姉さんだって俺の部屋に勝手に入って荒したりしてたから、文句を言われる筋合いわない……と、言いたい物の、男と女は違うからな。なんとなく俺が悪い気がする。

そう考えると、罪悪感が沸いてくるな……まあ背に腹は代えられないから、仕方ない。

とりあえず俺は悪くないと、自分に言い聞かせよう。

そうすれば少し気分が楽になるはず。

俺は悪くない、俺は悪くない……よし、これで多分大丈夫だ。

さて、今回姉の部屋から拝借してきたのは、カジュアルな洋服とスカートだ。

いかにも今風の服装と言って良いだろう。

なんとなくこれに決めた。別に俺の好みは反映させていない……断じて反映していない。

そんな上下一式セット片手に、今の襖を開く。

「とりあえず適当に持ってきた」

綺麗に畳まれた衣類を、正座でちょこんと座っているシノの前に置く。

「多分こういうの着てたら、全然問題ないと思う」

「な、なんか……カワイイですね」

うん、可愛いと思う。服に興味深々なシノが。

着替えたらどんなふうになるんだろうか。

可愛いんだろうな。

「あの、大河さん」

頭の中でイメージしていると、シノが声を掛けてきた。

「ん、なに？」

「あの、着替えたいんで……出ていてもらえると助かるんですけど……」

「あ、悪い」

俺は慌てて部屋から出た。

着替えたいって事ぐらい察しろよ俺。

◆◆◆◆◆

「ど、どうですかね。似合ってますか？」

アニメや漫画で定番となっている様なラッキースケベ展開に陥ることも無く、シノの着替えは終了した。

あれって、現実でやると相当ヤバイと思うのは俺だけだろうか。仮に相手が他人だったら、起訴されるかもしれない。

まあそんな事は置いておいて、シノの着こなしについてだが、

「す、凄ぇ似合ってるよ！」

言葉に偽りはない。とにかく似合っていた。

これは後で姉さんに怒られたとしても構わない。そう思わせるほど似合っていた。

「そうですか、それなら良かったです」

シノは万弁の笑みでそう言った。

「それにしても……これ、スカートが短いですね。こんなもんなんですか？」

「こ、こんなもんだと思う」

こ、これが普通だと思う……普通だよな？。

もう一度言わせてもらうが、このチョイスに俺の好みは反映させてない。絶対にだ！

「……なんか恥ずかしいです」

シノはボソりとそんな事を言う。

ま、まあ確かに、全身を隠す様なローブから一転、現代人御用達のスカート……いや、御用達かは男の俺には分からんが、とりあえず急に露出が多い服装になったら恥ずかしいだろう。

「で、でも似合ってるぜ。大丈夫だ」

……なんにせよこれで問題はクリア……だよな？

「とりあえず、これで外を出歩けるな」

「そ、そうですね。少し恥ずかしいですが……」

シノは顔を少々赤らめてそう言う。

なんというか……恥ずかしそうにしているシノ、可愛いなぁ。

そんな事を考えながら、俺は部屋に掛った時計を眺めた。

もう夕飯の買い物にでも行った方が良い時間だ。

本当は医者の帰りに寄って行こうと思ったんだが忘れてた。

「なあ、今から買い物行くんだけど、お前も行く？」

「は、はい。私も行きます！」

シノが元気よく主張する。

「じゃあ決まりだな」

財布を手に取る。

「じゃ、さっさと行こうぜ」

「はい」

そういった会話を交わした後、俺達は家を後にした。

魔王ｉｎショッピング

「わぁ、人が沢山いますね」

「まあデパートだからな」

おそらくシノにとって初めてのお出かけポイントはデパートとなった。

そうだ……シノに服でも買ってあげるか。姉の服はいずれ証拠隠滅の為、元の場所に返さねばならないのだから。

俺がそうやって今日の買い物計画を立てていると、

「あ、古川くんだー」

と、のほほんとした声が聞こえてきた。

「よう、宮野。奇遇だな」

宮野茜。なんかのほほんとしていて危なっかしいクラスメイトだ。

「って、古川君。いろいろとどうしたの？」

「いろいろ？」

はて、何のことだ？

「足と隣の女の子の事だよ」

ああ、そういうことね。

シノの事はなんて説明しておこうか。

「ああ。こいつはシノ」

「初めまして、シノっていいます」

うん、普通のあいさつだ。

ここに来る最中に、魔王の娘とか、そういう類の事の発言は禁止と釘を打っておいたのが効いたのだろうか。

何も知らない奴の前で悪魔とか名乗ったら死ぬからな。社会的に。

「私は宮野茜。よろしくね、シノちゃん」

宮野も自己紹介をする。

「それで、二人はどんな関係なの？」

宮野が興味深々な様子で聞いてきた。

あ、これなんて言えば良いんだろう。

……思いつかねえ。

「えーっと、居候です」

と、シノがストレートな返答した。

えぇ……そこは誤魔化してよ。そんな事言ったら面倒な事になりかねないじゃん。

「居候……古川君、なんか色々と面白い事になってるね！　もしかして彼女さん？」

「ち、ちげーよ！」

「そそそ、そうですよ！　そんな間柄じゃないですよ！」

俺とシノが必死に釈明する。

なんかシノの顔が赤い。

そりゃ恋人と勘違いされたら恥ずかしいだろう。

「じゃあなんでシノちゃんは居候なんかしてるの？」

なんでって言われてもなあ。説明しようがない。

「そ、そんなことよりさあ、足の事とかの方が気にならねえか？　全治二カ月が一週間で治ってんだぜ？」

苦し紛れで話をそらす。

「そうだ、足なんで治ったの！　一体どんなことしてたら治ったのかな！」

ああ、宮野が馬鹿で助かった。

って、馬鹿なのは俺も同じだった。

せ、説明しようがねえぇぇぇぇぇぇぇぇッ！

でも話を振っちまったからには、なにか話さないと……。

俺は冷や汗をかきながら、脳裏に浮かんだ事を口から垂れ流す。

「えーっと……公園で寝てたら治った」

いくらなんでもこれは無いだろオイィィッ！

自分で言っててなんだけど、これは無いわ。無理だわ。余計に話をややこしくするだけだわ！

「そっか、通りすがりのスーパーお医者さんが治療してくれたんだね」

宮野が馬鹿で良かったぁ！

なんで納得してんだよ！　まあ誤魔化せたから良かったけど。

にしてもこんな事を信じるなんて純粋すぎる。いろいろと心配になってくるな。

それになんだ、スーパーお医者さんって。日本語か横文字かどっちかにしろよ。

「きっと結君が聞いたら、闇医者凄げぇ！　とか言いそうだね」

「ああ、スーパーお医者さん、闇医者なんだ」

寝ている人を勝手に治療していく闇医者。

なんだソイツ、危険人物すぎる。もし実在していたら、早々と出頭を希望するぞ。

「な、なんか危険な香りがしますね」

一応流れ上、お前がスーパーお医者さんポジションなんだけどな。

ちなみに、宮野の話に出てきた結君というのは、俺の親友である篠原結城の事だ。宮野とは幼馴染の関係になる。

「あとで結君に、古川君の足が治ったってメール入れとかないと」

「そういや結城の奴、今頃何してるかな」

結城は何を思ったのか、夏休みを利用して自分探しの旅に行っている。

アイツの行動力にはよく驚かされていたが、今回は今までと比べ物にならなかった。

夏休み開始直前に『俺、自分探しの旅で全国回ってくるわ』などと言いだし、本当に実行しやがった。

あの時は本当にビビったが、まあ結城だから仕方ないという感じで諦めている。

「それで、シノちゃんはどうして居候なんかしているの？」

お、覚えていやがった！　まあ忘れていてくれたらくれたで、心配になるんだけども！

「なあ、宮野」

ゴホン、と咳払いし、宮野の肩に右手を置く。

「世の中には……触れてはいけない事情が沢山あるんだ……分かるか？」

と、語りかける。

「な、なんだか良くわからないけど分かった！」

どっちだよ。

「まあ古川君はお人好しさんだからね。そう言うことにしておくよ」

「……まあそんな訳だ。じゃあ俺達そろそろ買い物済ませるから、もう行くよ」

「そっか。じゃあね、古川君、シノちゃん。また今度」

「おう、じゃあな」

「ま、また今度」

そんな言葉を交わし、宮野は俺達の視界から消えた。

「じゃ俺達も行きますか」

「はい」

俺達はその場を後にし、衣服店へと向かった。

◆◆◆◆◆◆◆

「なんだか服が沢山売ってますね」

「そりゃそういう店だからな」

二階に位置する衣服店は、姉曰く『それなりに有名なブランド店』らしい。

ユニクロ商品と比べると、多少値が付くが、それでも良心的な値段設定になっている。

「ま、とりあえず好きなの選んでくれよ。金はある程度あるからさ」

どうもうちの両親は、会社で結構な地位に立っているらしく、その恩恵で、俺に振り込まれる生活費は、結構な額となっている。

それに加え、二か月分の医療費が、足が直ったことにより浮いた。

ある程度値が張る商品でも、数着ならなんとでもなる。

そういえば以前父さんに、生活費もう少し減らしてもいいという事を伝えた際、

『お前位の年頃になると、彼女の一人や二人位できるだろ。そういう時に金に困ってちゃカッコ悪いぞ』

と、俺の提案を却下した事があった。

まあシノは彼女ではないが、父さんの考えのおかげで今回は助かった。

そういえば、彼女の一人や二人って言ってたけど、二人だったら二股だよな。

二股なんて修羅場になりかねん事はしねえよ。ハーレム物のラノベじゃあるまいし。

まあ二股がどうこう以前に、一人すらできないんだがな……残念な事に。

「じゃ、あっちの方見てきますね」

そう言ってシノは、珍しい物を眺める様に、店内を進んで行く。

ま、自分の世界には存在しない衣服が沢山あるんだ。

そりゃ珍しがるよな。

「……さて」

シノがどんな服を選んでくるかは、後のお楽しみにして、俺も新しい服買うかな。

「お、これなんかいいじゃん」

個人的に気にいった服を取り、値札を見る。

あ……やっぱ結構高いな。

いくら金があるっていっても、無駄遣いはいけないし……。

「……今度ユニクロ行くか」

俺はそっと、手に取った服を元の場所に返した。

魔王ｉｎショッピング（後書き）

なかなか話が進みませんね……もう少しこんな感じのノリで続きます。

もしよかったら感想を書いていただけると嬉しいです。

未知なる文化

結論を言うと、シノのセンスは良かった。

上下三着ずつ衣服と、パジャマなどを購入した為、結構財布の中身が吹っ飛んでしまったが、今まで余り使ってこなかったお陰で、まだ結構な額が残っているから、気にすることは無い。

……いや、流石に気にしないのは無理な話だ。

ＰＳ３買った時以来だぞ、こんな出費は。

「ありがとうございました、大河さん」

シノが満弁の笑みを浮かべる。

「いいよ。この位、お安い御用だ」

まあ全然お安くはないんだが、シノの笑顔を見ると、お金のことなんか別にいいか、という気分になる。

「さて、今日の晩飯何にすっかな」

「私は何でも良いですよ」

楽しそうにそういうシノと、適当な会話を交わしながら、俺達は食品売り場へと足を運んだ。

◆◆◆◆◆◆

その後、俺達は食品コーナーで晩飯の食材を購入して帰宅した。

今日の晩御飯は夏野菜カレーにすることにした。

我が家の夏場の定番メニューだ。

「手際良いですね」

「まあ慣れだよ、慣れ」

両親が居た時も、不定期に料理はしていたからそれなりに料理は得意だ。

「私にできる事って、何かありますか？」

「うーんと……今日はちょっとねーかな。あっちの部屋でテレビでも見ててくれ」

「テレビ？」

「ああ、あの黒い箱だよ。近くにボタンが沢山ついたリモコンって奴が落ちてるから、それの右上のボタンを押してみろ。電源つくから」

「な、なんだか良く分かりませんけど……分かりました」

どっちだよ。

シノがスタスタとキッチンから居なくなった。

さて、どんな反応をするかな。

「た、大河さん！　は、箱の中に、人が……ッ！」

テンプレ台詞を吐きながら、キッチンに掛け込んできた。

なんというか……お約束な展開だ。

しかしこのお約束展開を、実際にお目に掛る日が来るとは、夢にも思わなかったな。

その後も、未知なる道具。テレビにテンションが上がりっぱなしのシノを眺めながら、調理を進めていった。

◆◆◆◆◆◆◆

「どうだ？　結構自信あんだけど」

「すごくおいしいですよ」

カレーを作り終える頃にはテレビにも慣れた様で、テレビを見ながらの一般的な食事風景が食卓に広がっていた。

「それにしても……こっちの世界の化学力は凄いです。まさかこの

黒い箱がそんな凄い物だったなんて……」

さっき軽くテレビについて軽く説明した。

正直、テレビの事を知らない奴なんて初めて見たので、シノの呑み込みが良かったのかどうかは分からない。

採点基準が分からないからな。

まあ理解することに意味があるのであって、大事なのはスピードではない。

「ところで、テレビの前に置かれている白い箱はなんですか？」

と、言わずと知れたゲーム機を指差す。

「ゲームだよ。後でやってみるか？」

「はい、やってみたいです」

さて、テレビの時もそうだったが、シノがどんな反応をするか楽しみだ。

俺はシノの驚く顔を想像しながら、カレーを食べ進めた。

◆◆◆◆◆◆

「す、凄いです。箱の中のキャラクターが思いのままに動きます！」

目を輝かせながらシノがプレイしているのは、国民的アクションゲーム。

画面内では配管工のおっさんが、左から右へ走って……あ、落ちた。

「あ、オジサンが……死んだ……ッ」

「なんで目をウルウルさせるほど、マ〇オに感情移入してんだよ。そんなプレイする奴初めて見た」

某番組で百人に聞いても、絶対タモさんストラップ貰えねえなこれ。もちろん該当者はゼロだろう。

その後、シノは何度もマ〇オを奈落の底に突き落としながらも、面を進めて行った

最初は感情移入がハンパなかったシノだったが、今はなんだか楽しそうにコントローラーを握っている。

そうだよ、これが正しいマ〇オの遊び方だ。感情移入していたら、冒険は進まない。

俺はそんな事を心の中で呟きながら、画面と、ゲームに熱中しているシノを眺めていた。

「そうだ、キリの良い所で、風呂入ってこいよ。沸かしてあるぞ」

この連戦の途中に沸かしに行ったからな。いい感じの湯加減になっているはずだ。

「あ、じゃあ先に入っても良いですか？」

「どうぞどうぞ」

そう言ってシノを部屋から送り出す。

家の案内は済ましたし、場所は分かるだろう。

「あ、そうだ」

そう言って部屋を覗き込むシノ。

「……覗かないでくださいよ」

「の、覗かねーよ！」

「いや、でも……こっちの世界って、覗くのが文化になってるんじゃないですか？」

「なってねーよ！」

一体何処をどう勘違いすればそんな結論に至るんだ。

「だって……」

と、シノは、茶の間に置いてあった漫画雑誌を指差す。

「その……そういう描写が沢山あったから……その」

「……漫画と現実を一緒にするのはいけない事だぞ」

まあ、今俺も漫画の主人公の様な境遇に立たされてるわけだが。

「それに、俺がそんな事する奴だと思うか？」

「そりゃ大河さんは、良い人だからそうは思いませんけど」

「なら安心して入ってこい」

そう言って送りだす。

まあ覗きたくないかと聞かれると、そこは男として勿論覗きたい訳だが、嫌われたくはない。

女の子の風呂を覗いても、友好関係が続いて行くのは漫画の世界だけなんだ。

「しっかし、異世界から来た奴が、よくこっちの世界の本を読めるよな。これも魔術か？」

翻訳魔術とか使ってんのかな。これをコピーしておけば英語のテストは楽勝だな。

いや、でも魔法陣とか出てきたりしたら、確実に面倒な事になる。

そういえば、今俺が使える結界だって、使う場面が思いつかない。

まあ結界なんて使う場面に巻きまれたくはないけど。

俺は魔術言語を呼び出し、結界を発動させる。

「結局は自己満足の為の力ってことか」

とりあえずそう結論づけ、しばらく眺めた後、結界を消滅させる。

これを使う場面は無い。

でももし使わなければならない場面が訪れた時、俺はちゃんとこの結界で何かを出来るのだろうか。

「ま、考えても仕方がねえか」

そういうのはきっと、場面に立ちあって初めて分かる事だ。今考えても何も変わりはしない。

だから今俺がやるべきことは、

「さて、キノコは何処かなっと」

シノの為にマ〇オの残機を増やしておくことだ。

フタリノ夜

時刻は十時を回っていた。

今日は色々な事がありすぎて、なんだか疲れが溜まっている。

それはシノも同じの様で、既に一階の空き部屋で眠っているはずだ。

「マジで漫画みたいな一日だったな」

俺はベッドに転がりながら、今日の事を振りかえる。

本当に、とんでもない一日だった。

異世界から来た魔王の娘と出会って、足直してもらって、その場の思いつきで言った提案で、今は一つ屋根の下。

なんというか……まるで主人公みたいだ。

「っても、能力の方は、全然主人公らしくないもんだけどな」

右手を天井の蛍光灯に翳す。

魔術を劣化させて自分の物にする能力。

少なくとも、主人公が持つような能力ではないだろう。

バトル漫画だと、主人公に倒される噛ませ犬の様なキャラが持っ

てそうな能力だ。

「そう考えると、なんかカッコ悪いなー、俺」

まあ、別に俺は誰かと戦ったりなんてしないから、噛ませ犬の様な能力でも一向に構わないが。

「とりあえず……寝るか」

疲れている時は、早めに寝た方が良いだろう。

ベッドの近くに置いてあった蛍光灯のリモコンを取り、蛍光灯を切る。

明るかった部屋が一転して、碌に周りの物が確認出来ない暗闇へと移り変わった。

うん。やっぱり電気消すと眠くなってくるな。

そういえば、なんで明るい所より、暗いところの方が寝やすいんだろう。

……まあどうでもいいが。

変な事考えている暇があったら寝よう。その方が時間を有効に使った感じがする。

と言う訳で、ゆっくりと目を瞑った。

◆◆◆◆◆◆◆

どれぐらい時間が経っただろうか。

だんだん眠くなってきて、もうすぐ眠りにつけそうと言う時に、部屋の扉が開く音が聞えた。

「ん……なんだ？」

しかしまあ、眠いので音だけじゃ状況を理解できなかったんだが、音のした方に目をやると、直に状況を理解した。

「どうかしたのか、シノ」

扉を開けたのは、枕を持ったシノだった。

まあ家にシノしか居ないから当然なんだが、そういった簡単な判断も出来ないほど、俺は今眠いということだろう。

「いや、あの……一人で寝るの……なんか怖くて」

怖いってオイ。シノが何年生きているかは知らねえけど、その容姿で怖いってのは、なんとなく変な感じ……って待てよ？

よく考えたら、シノって兄が居なくなってから、ずっと一人で居たんだよな。

その所為で一人で居るってのがトラウマになっているとか？

よくわからないけど……否、よくわからないからこそ、此処はシノの意見を尊重させてやるべきではなかろうか。

「えーっと……それってつまり？」

「……今日はここで寝かせて欲しいんですけど」

なんとなく答えが分かっていたが、どうやらそれは当っていた様だ。

「……いいよ。俺のベッド使え」

「いや、私床で良いですよ」

「いや、こういう時に、床で寝るのは男って相場が決まってんだよ」

……多分な。

確証は持てないが、俺の中ではそうなっている。

ま、まあ。添い寝って選択肢もあるが……いやいや、無い無い！

……考えたら恥ずかしくなってきた。

「だからさ、お前は心補くベッドを使ってく――」

「あ……ッ」

何か思いついたように、そう声を挙げるシノ。

「どうした？」

「いや、大河さんのベッド広いから、二人で寝ても大丈夫なんじゃ……とか？」

と、言うシノのはどこか恥ずかしそうだった。

「い、いや。でもな……あんまりそういう事は、良くないと思うんだが……」

「でも……大河さんをベッドから追い出すのも気が引けますし……」

しばしの沈黙が訪れた。

や、ヤベエ。俺なんて返答すればいいんだ。

ＹＥＳ？　ＮＯ？　分かんねえよ、こんな状況になった事なんか、十四年生きてきて一度もないもん。

ほ、ホントどうするよ俺。

あ、そういや、さっきシノの意見を尊重するとかいう結論出したんだっけ？

……もうどうにでもなれ！

「わ、分かった。シノがいいなら……別に良いけど」

は、恥ずかしくて熱でそうだ。

「は、はい！」

そして、何故自分から提案して、動揺しているんだ……やっぱ恥ずかしいのか？

恥ずかしいなら、最初から何も言わないでほしかったぜ……俺も恥ずかしいからよ。

俺は壁の方により、シノの寝るスペースを開ける。

そして、俺が開けたスペースにシノが寝転がり、俺達は背中合わせの状態となった。

「……大河さん」

シノが呟くように話しかけてきた。

「……なんだ？」

「……お、襲わないでくださいよ」

「お、襲わねえよ！」

んな事しねえよ……多分。

……にしても、緊張感が半端ねえ。

眠気が一気に覚めちまったぞ。

そんな俺とは裏腹に、シノの方からは、早くも寝息が聞えてきた。

「おーい、シノ。寝たのか？」

返事無し。どうやら熟睡中だ。

は、早いな……。

「とりあえず……俺も寝よう」

そう呟き、俺は再び目を瞑り、俺の意識はまどろみの中へと消え……無い！

そんな気配一切ない！

「どうすんだ……全く眠れる気がしねえぞ」

どうする？　やっぱり今からでも床で寝るか？

「そうしよう。このままじゃ絶対眠れねえ」

俺はゆっくり体を起……せない！？

寝がえりを打ったシノが、俺に抱きついてきた。

いや、男として嬉しいんだが、嬉しいんだが動けない。

つまり、つまりだ。

「俺、もしかすると、今日寝れない？」

考えるとゾッとする予想だった。

◆◆◆◆◆◆◆

朝、居間で朝食を食べている時の会話。

「あれ？　大河さんクマ出来てますよ」

「ああ、そう……？」

結局興奮が収まらず、気付いたら日が昇っていた。

今日からは何が何でも床で寝よう。

でないと……睡眠不足で死ぬ。

割と洒落にならない切実な問題だった。

魔術の使いどころ

シノがこちらの世界に来て、四日が経った今日。

「な、なんか色々と凄い所ですね」

「アレ？　シノちゃん遊園地初めて？」

俺は、シノと宮野と共に遊園地へとやってきていた。

発端は昨日携帯に掛って来た、宮野の電話。

『親戚の人がくれた、遊園地のチケットが三枚あるんだけど……古川君とシノちゃん行く？』

俺と宮野は友人だし、シノもアレから何度か宮野と会っていて、仲良くなってるみたいだったから、俺は迷わずＯＫした。

これは憶測だが、チケットが三枚ってのは恐らく、俺と宮野、そして結城の分だったのだと思う。

小学校の頃から一緒に遊んでいるメンバーだから、親戚の人が三人分用意してくれたのだろう。

というか、親戚の人に一言言わせてもらうと、何故三枚じゃなく、二枚にしなかったのかと言う事。

宮野と結城は、何となくいい雰囲気だし、そう言う所に配慮してもよかったんじゃないだろうか。

と言っても、現在結城は自分探しの旅に行ってて、此処には居ない。

だからこそ、シノの分のチケットがあったというわけだ。

まあ無くても、俺が買うんだが。

「それで、まず何に乗る？　ジェットコースタ？」

「じぇっとこーすたー？」

「うん。あのレールの上を走っている奴だよ」

宮野の指差す先には、乗客の絶叫を纏って急降下するジェットコースター。

この遊園地は国内でもそれなりに有名な遊園地で、この遊園地のジェットコースターもテレビの絶叫アトラクション特集で何度か取り上げられた事のある、有名なアトラクションだ。

前に来た時に乗ったが……テレビで紹介されるだけの事はあるな、という出来だった。

「な、なんだかとんでもない乗り物ですね……」

シノの顔が引きつっている。

まあ……無理も無い。

「あ、もしかして怖い？」

宮野の問いに、コクコクと首を縦に振るシノ。

……言わせてもらうと俺も怖い。

なんというか結城と宮野は、こういった絶叫系の乗り物が大好きらしく、俺も良く付き合わされた。

だから知っている。

「怖いのを楽しむのがジェットコースターだよ！」

「あ、ちょっと。ほ、本当に乗るんですか！」

俺の友人二人は、例え嫌がっても無理やり乗せる。

「古川君も乗るよね？」

「断っても無理矢理乗せるんだろ？」

俺は少々ため息をつきながら、シノの手をグイグイ引っ張る宮野について行った。

◆◆◆◆◆◆◆

「……な、なんか暴走したドラゴンに乗っている様な感じでした」

「それがどんな物かは分かんねえけど、確かにコレはとんでもない代物だ」

何度乗っても慣れねえ。

まあ、楽しい。楽しいが、尋常じゃなく怖い。

「暴走したドラゴンって、また面白い感想だね。シノちゃんは想像力豊かだねー」

一人元気な宮野。

コイツは化け物か？

◆◆◆◆◆◆◆

その後も色々なアトラクションに乗っていく中で、いつの間にかシノも絶叫系を好むようになってしまった。

そんな訳で、乗るアトラクションの比率が絶叫系多めという風になってしまって、ヘロヘロになった俺は、つい先程休憩案を提示した。

まあ二人も疲れていたようで、その案は簡単に通過した。

というわけで俺は、近くの売店に飲み物を買いに行って、現在その帰りだ。

やっぱこういうのは男の仕事かね……一人で三人分持つのは大変だな。

「にしても次は何乗んだろ」

この遊園地は絶叫系が多い。

まだ乗っていない絶叫系アトラクションも多々あるので、この先の展開はなんとなく読める。

「って……何やってんだ？」

二人が休んでいる地点に戻ってきた俺の視界には、いかにもチャラい、多分高校生位の男二人と、そんお対応に困っている二人が居た。

中学生相手にナンパとか……このロリコンどもめ。

いや、中学生好きはロリコンの対象に入るのか？

冷静に考えると、中学生は入らないな。うん。

って、そんな事はどうでもいい。助けに入らねえと。

俺は近くの空きテーブルに買ってきたジュースを置き、駆け足で二人の元へと向かう。

「あ、大河さん」

シノがこちらに気づいて、名前を呼んだ。

「あ？　んだてめえ」

こっちに凄ぇガンを飛ばしてくるチャラ男Ａ

って、こういう場面って「ちっ、男連れかよ」とか言って、引いてくもんじゃないのか？

「コイツら俺の連れなんで……どっか行ってもらえませんか？」

「んだとコラ！」

なんというか……絶対に話しが通じないタイプだな……外見がチャイ癖に、口調はテンプレな不良だし。

……もうなんか面倒くせえ。

俺は魔術言語を脳内に巡らせる。

発動させるのは、結界の術式ではなく、もっと違った術式。

一昨日から、俺は日常生活に役立ちそうな魔術ってのを身に着けたくて、いろんな術をシノに使ってもらって、それをコピー……いや、ラーニングして自分に取りこんでいた。

ちなみにラーニングと呼んでいる理由は、その方かカッコいいからという以外、理由は無い。

まあ……その辺はどうでもいい。

魔術をラーニングしている際に分かった事だが、覚えられる魔術の数は無限ではなく限界が有るようで、その数は三つ。

一つは、結界魔術。

使いどころが無いが、初めて使った魔術だから愛着が会ったから、まだ持っている。

二つ目は、回復魔術。

単純に、怪我した時に便利だと思ったからだ。

そして三つ目。

「本当にどっか行ってくれませんか……ね！」

俺は三つ目の魔術を発動させた。

魔法陣は出ない。

これもラーニングしている際に分かった事だが、魔法陣というのは、大型魔術を使うための補助として、術式の一部に取り組まれている物らしい。

そして今俺が使った魔術は、中級魔術。よって魔法陣は出現しない。

「な、何だコイツ！」

チャラ男達が後ずさり、そして逃げ出す。

どうやら……俺の発動した威嚇魔術は成功したようだ。

シノの話しだと、威嚇魔術は下級悪魔程度の奴らにしか効かない様な物らしい。

それを劣化して使っている訳だから、通じるかどうかは分からなかったんだけど、どうやら劣化しててもチャラ男程度には効くらしい。

「あ、ありがとう。古川君」

あまりに呆気なく逃げて行ったチャラ男達に少々首を傾げながら、宮野が俺にお礼を言う。

「ありがとうございました、大河さん」

シノも安心したように、俺にそう言う。

そんなシノに、俺は宮野に聞えない様に声を掛ける。

「……なあ、なんでお前魔術で追い払わなかったんだ？」

「いや、あの……動揺して頭から抜けてました」

「……魔術持ってる意味ねえな」

攻撃魔術を使うことができないシノにとって、数少ない抵抗手段だろうに、それが頭から抜けるとか……ホント、悪魔って感じしね

えよな。

「あ、そうだ。ジュース、ジュース」

俺は空きテーブルに置かれたジュースを取り、再び戻ってきて二人に手渡す。

「ありがと、古川君」

「ありがとうございます」

二人は再び俺に礼を言う。

「で、次何乗んのか決めてんの？」

「あれ！」

「あれです！」

二人が同時に指差したのは、空高く聳えるフリーフォール。

嫌な予想が的中した瞬間だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4305ba/

劣化の魔術師

2012年1月14日21時47分発行